



藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない
部屋を潜入ルポする。

音楽学部音楽環境創造科

Department of Musical
Creativity and the Environment

研究室探訪

第八回

Visiting the Laboratory

音楽環境創造科は二〇〇二(平成一四)年四月に、取手キャンパスに開設された。二〇〇六(平成一八)年には、東京都足立区の協力のもと旧千寿小学校を改築して誕生した千住キャンパスに移転。このキャンパスには、音楽環境創造科のほか、大学院音楽研究科応用音楽学研究室、アトリエゾンセンターが教育、研究活動を展開している。

音響制作スタジオ、録音調整室、スタジオA、スタジオB、そして旧千寿小学校の体育館を改修した第7ホールなどの充実した設備を誇る千住キャンパスを活用して、音楽環境創造科では、音楽や音響に関する研究、映像、身体、言語、空間、メディアなど、音楽に隣接する表現分野の研究、コンピュータによる音響作品の創作や、映像、身体表現、メディアのための音楽制作、アートマネジメントや文化社会学、文化研究など、芸術と社会の関係に関する研究を通じて、芸術やそれを取り巻く環境を総合的に学ぶことができる。

教員は六名。就任順に西岡龍彦教授(作曲)、熊倉純子教授(文化環境)、亀川徹教授(音響学、録音技術)、市村作知雄准教授(身体表現・NPO論)、毛利嘉孝准教授(社会学、文化研究、丸井淳史准教授(音響心理学、コンピュータ理工学)。今回は亀川教授が担当する「録音技法研究」を取材してきた。

音楽環境創造科開設からまもなくして教員になった亀川教授は、当時は振り返り、次のように語る。「大学が社会の中でどういう役割を果たすか、ということ問われて

いた時代。そのなかで、音楽と社会をつなぐ人材を育成するというのが学科設立の主旨でした。そういった社会へ発信するための研究分野のひとつとして録音技術が取り上げられたのです」。

この日「録音技法研究」がおこなわれた録音調整室は、5・1サラウンドのモニタースピーカーシステムと32チャンネルのアナログミキシングコンソールを備える。「我々が聞いている音というのは、単なる物理的な現象と違い、耳を通して聴いているので、ひとりひとり違う聴き方をしているんです。たとえば同じ音の大きさでも、低音は高音に比べて聴こえにくい。そういう人間の聴覚の特徴を理解していないと、録音するとき、なぜそういう音に聴こえるのかわからないのです」。五つのグループに分かれて、各グループごとに二本のマイククロホンを使い、工夫してセッティングをする。そして、どういった音が録れたかを

受講生全員で考える。さまざまなマイククロホンの種類やその構造と機能、ステレオ録音によってなぜ音が立体的に聞こえるのか、二本のマイククロホンの間隔や指向性による聴こえ方の違いを学んでいくのである。

講義を受講する黒石紗弥子さん(学部二年)は、「高校は普通科で、学校とは関係なくミキシングをするのが好きだったので、文系でも学ぶことができるうえ、自分が知らない知識を持った仲間の話を聞くこともすごく楽しいですね」と語る。また染野拓さん(学部二年)は「高校時代、軽音部で演奏しながら、友だちのバンドの録音もしていたんです。この科には音楽マネジメントの授業もあり、これまで音響のエンジニアになりたいと思っていたのですが、ディレクションにまで志向が広がりました」とのこと。二人の話を聞いて、音楽環境創造科の横断性をうかがい知ることができる。



録音調整室でおこなわれた亀川徹教授の「録音技法研究」

